７月２０日（日）マルコの福音書１０章４２～４５節
「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」（４５節）

　イエスは、弟子たちを呼び寄せ、「異邦人の支配者と認められている者たちは、人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々に権力をふるっています。」と言われました。異邦人の支配者と認められている者たちと、あえてイエス様は言われましたが、すべての権力は、主の許しの中で与えられているものであって、イエス様も世の権力自体は認めています。しかし、神を知らない権力者たちは、神を恐れませんから、「人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。」とありますように、自分の願ったり、思うとおりに権力をふるいます。まさに権力は自分から出ていると思っているということなのでしょう。「しかし、あなたがたの間では、そうであってはなりません。」と、異邦人の支配者のふるまいと弟子たちの行動が異なるべきであることを語ります。つまり、「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。」と言います。仕える者になるとは、自分の利益のために他の人たちを利用するのではなく、また自分の上に立つ人のために自分が何かをしなければならないと思わせるのではなく、上に立つ者が率先して他の人の利益のために行動するということです。４５節の「人の子」とはイエス様のことですが、イエス様も仕えられるためではなく、仕えるために来たと言われました。イエス様は、完全に神の御子としてのあり方を捨て、私たちと全く同じ人となられました。そこにイエス様の謙遜さや仕える姿があり、実際に父なる神様に従い通されたところにしもべの姿がありました。そして「また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです」とありますが、イエス様は人類の贖いのためにいのちを捨てることによって、謙遜さを示されました。しかし、イエス様は決して強いられてではなく、自ら進んで、私たちを愛して十字架への道を歩まれました。私たちも自ら進んで、他者を愛する愛からしもべの道を歩むべきです。イエス様の姿を通して現されるしもべの道は、ただ他者の益のために自らをささげつつ、もししもべとなるために妨げるものがあれば、それを喜んで捨てることです。私たちが歩んでいる道は、どんな道でしょうか。

７月２１日（月）マルコの福音書１０章４６～５２節
「先生、目が見えるようにしてください。」（５１節）

４６節に「ティマイの子のバルティマイという目の見えない物乞いが、道端に座っていた」と、名指しで特筆されています。それだけ印象深い人物であったということなのでしょう。まず、このバルティマイに関しての特筆すべきことの一つが、彼は、ナザレのイエスがおられると聞いたにもかかわらず、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と叫び始めました。ダビデの子とは、彼のメシヤ信仰を表しています。ですから、バルティマイはイエスが旧約聖書に預言されたまことのメシヤであるなら、必ず自分の目を開いてくださると信じたのでしょう。それとともに、彼は「私をあわれんでください」と叫びました。自分はイエス様にあわれんでいただかなければならない存在であることを自覚していました。私たちが謙遜にイエスに対してあわれみを願わないのは、私たちはイエス様からあわれんでいただく必要などないとの傲慢な思いがあるからではないでしょうか。

多くの人たちが彼を黙らせようとたしなめたのは、彼はイエスに何かをしてもらえるような立場になく、イエスをわずらわせることはないと思ったのでしょう。しかし、そのような周りの反応にひるむことなく、彼は「ダビデの子よ、私をあわれんでください」とますます叫びました。イエスは立ち止まって、「あの人を呼んできなさい」と言われたので、人々は態度を変えて、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたを呼んでおられる」と言いました。イエスが呼ばれた時に、バルティマイは上着を捨てて、大急ぎで、躍り上がるほどに喜んでイエスのところにやって来ました。そのバルティマイにイエス様は「わたしに何をしてほしいのですか」と尋ねました。イエス様は、バルティマイは目が見えるようにしてほしいと思っていることは分っていたはずです。それでも、イエスはバルティマイ自身から彼の願いを聞こうとされたのです。イエス様は「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました。」と言われました。ここに不思議なことが書かれてあります。つまり、あなたの信仰が、あなたの目を見えるようにしましたではなく、あなたを救いましたとあるのです。つまり、バルティマイは、ただ目が見えるようになっただけではなく、彼の人生自体が変えられたのです。物乞いとして道端に座っていた生活から、エルサレムで十字架にかかろうとされているイエスについて行ったところに、その変化が現れています。

私たちも、イエス様の目から見れば取るに足らない存在だったかもしれません。しかし、その私たちがイエス様にあわれみのゆえに、「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました。」と言っていただけるようになったのです。そのあわれみを受け、信仰による救いをいただいた私たちは、どのような信仰の歩みをしているでしょうか。私たちの前には、十字架への道を進むイエス様の姿がはっきりと見えていますか。それとも私たちの人生においてイエス様がどこにおられるか分らないような歩みになってはいないでしょうか。

７月２２日（火）マルコの福音書１１章１～６節
「主がお入用なのです。」（３節）

私たちは、今日の箇所からイエス様がすべてのことに関して妨げられることなくみこころを行われるお方であることを知ることができます。イエス様は二人の弟子を使いに出して、向こうの村にはいるとすぐ、ろばの子がつながれていることを知っておられました。また、それを連れて来ようとして、とがめられたなら、「主がお入用なのです。」と言えば、すぐに渡してくれることも知っておられました。そのようにしてイエス様は、ご自分の考えどおりに、また願っておられるとおりに、すべてのものを支配し、動かすことのできるお方なのです。そのようにして、主はすべてをご存じであり、そして、みこころをなすために私たちに務めを与えて、果すべき役割をお命じになることがあります。もちろん私たちにはなぜ主がこのようなことを命じられるのか理由が分らないこともあるでしょう。例えば、子ろばをイエス様のもとに連れて来るにしても、白昼堂々と人の所有している子ろばを連れていこうとするのですから、「なぜそんなことをするのか」と言われるのは当たり前で、下手をしたら家畜泥棒と間違えられそうです。しかし、すべてをご存じの主にゆだね、主のご計画がなされることを信じて、与えられた務めを果してまいりたいと思わされます。

まだだれも乗ったことのない子ろばをほどいて連れて来るように命じていますが、なぜそんなことをするのかと言ったら、「主がお入り用なのです。すぐにまたここにお返しします。」と言うようにと命じられています。主は、この子ろばに乗ってエルサレムに入城することをみこころとされておられました。そのためには、この子ろばがどうしても必要だったのです。子ろばなど、どこにでもいるだろう、他の子ろばではだめだったのかという考えも出て来るかもしれません。しかし、イエス様にとっては、この子ろばでないとだめだったのです。私たちも教会の中で、なるべく不特定多数の中に紛れてしまおうと思うことはないでしょうか。日本全国のクリスチャンの中に紛れてしまって、奉仕は私ではなく、だれか他の人ではだめなんだろうか、私が主の働きに献身しなくても、私よりも優秀で信仰熱心な人がいくらでもいるではないかと思ったりすることはないでしょうか。主にとって、私やあなたでなければならない働きがあります。ですから、主の召しをおぼえつつ、与えられる主の働きにあたりたいと思わされます。「主がお入り用なのです！」

７月２３日（水）マルコの福音書１１章７～１０節

「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。祝福あれ。われらの父ダビデの、来たるべき国に。ホサナ。いと高きところに。」（９，１０節）

イエス様がろばの子に乗ってエルサレムに入られることは、ゼカリヤ書９章９節の預言の成就でした。そこには「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」と書かれてあるとおりです。ソロモンの時代以降、馬が主役で、ろばは婦人や子どもの乗り物、また荷物の運搬用として用いられていました。イエス様は、預言どおりに子ろばに乗ることで、身を低くされ、平和をもたらす方としてエルサレムに入られたのです。イエス様は、力によってではなく、特に軍事力によってではなく、柔和と謙遜と愛をもって仕えるお方であることをお示しになられました。特にエルサレムに入られるのは、「多くの人の贖いの代価として、ご自分のいのちを与えるためであった」（１０章４５節）だったのです。

人々は、自分たちの上着を道に敷き、葉の付いた枝を野から切って来て、道に敷きました。上着を道に敷くというのは、列王記第二９章１３節などを見ますと、王に対する行動であり、木の枝を道に敷くというのは古代オリエントでは、王や凱旋将軍を迎えるときの行動です。まさにイエス様は人々に王として迎えられたことが分ります。それと同時に、他の福音書ではイエス様のことがさまざまな呼び方で呼ばれています。マルコの福音書では「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。祝福あれ。われらの父ダビデの、来たるべき国に。ホサナ。いと高きところに。」と人々が叫んだと記されていますが、マタイの福音書２１章９節では「ホサナ、ダビデの子に」、ルカの福音書１９章３８節では「主の御名によって来られる方、王に」ヨハネの福音書１２章１３節では「イスラエルの王に」とあります。実際に、人々はさまざまなことを叫びながらイエス様を迎え、それをそれぞれの福音書の記者が記録したわけですが、いずれも人々はイ

エス様が来るべきメシヤとの期待と喜びを持って叫んでいました。そしてその期待は自分たちをローマ帝国の支配からの救済でした。ここにイエス様と人々との考えの大きな違いがあります。イエス様は誇り高い王としてではなく、へりくだられたメシヤとして都に入られました。それと同時に人々をローマ帝国から救うためではなく、罪とサタンと死の力から解放されるために、イエス様は来られたのです。

私たちにとってイエス様は、どのようなメシヤ（救い主）でしょうか。自分にとって都合のよいメシヤになってしまってはいないでしょうか。むしろ、へりくだり、平和をもたらす方として来られ、多くの人の贖いの代価として、ご自分のいのちを与えるために十字架への道を歩まれたイエス様に従う者でありたいと思わされます。

７月２４日（木）マルコの福音書１１章１１～１４節
「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように。」（１４節）

１１節に「こうしてイエスはエルサレムに着き、宮に入られた。」とあります。まさに、宮において礼拝されるべきお方、神の御子が直接宮に入られたのです。しかし、そのことには誰も気がつかなかったでしょうし、「そして、すべてを見て回った後」とありますが、恐らく宮の状況を注意しながらゆっくりと見て回られたことでしょう。

「翌日、彼らがベタニアを出たとき、イエスは空腹を覚えられました」（１２節）空腹を覚えられるイエス様のお姿に、まことの神であり、まことの人であられたイエス様のお姿を見ると同時に、ここでの空腹はかなりのものであったことが分ります。恐らくイエス様は食事も十分に取る時間がないほど熱心に働かれたお方だったのでしょう。それとともに、イエス様は群衆たちの空腹は気にされて、彼らを満腹にするみわざをなさいましたが、イエス様は決してご自分の必要のためにはみわざを用いられないお方だったのです。

１３節に葉しか茂っていないいちじくの木が出てまいります。そしてその木に向かってイエス様は「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように。」と言われました。（１４節）これは、イエス様からのさばきの宣言と言えますが、なぜイエス様は、そのように言われたのでしょうか。それは、このいちじくの木が葉が茂るばかりで何の役にも立たないからです。これは、偽善的で、敬虔そうに振る舞うイスラエルの民や指導者を象徴していて、心が伴わない、口先だけの礼拝や祈りを表しているとも言えます。神殿を見て回られたイエス様からすれば、エルサレム神殿は、まさに葉が茂るばかりで何の実もないいちじくの木に見えたことでしょう。まさに人々の心は神から離れ、礼拝や祈りは、口先だけで神を敬うための空しい儀式になっていたのです。これを私たちに当てはめますと、私たちの信仰もただ年数が長いだけで、何の実も実らせることのない葉だけが茂っているいちじくの木のようになってはいないでしょうか。そして、私たちの教会も福音宣教の使命を忘れ、争いを繰り返し、ただ枯れるのを待つだけの教会になってしまってはいないでしょうか。しかし、イエス様は、どのような思いで１４節の「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように。」と言われたのでしょうか。イエス様の心には嘆きがあり、深い悲しみがあったはずです。決してイエス様が悲しみながら私たちに対して、「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように」などと言わせてはいけません。豊かな実を結び、それがイエス様を喜ばせ、周りへの証しとなるようにすべきです。

７月２５日（金）マルコの福音書１１章１５～１７節
「わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる。」（１７節）

　イエス様は、再び神の宮すなわち異邦人の庭に行かれ、そこで売り買いしている者たちを追い出し始められました。まさにこの宮の様子からも、葉しか茂っていなかったいちじくの木のように、悔い改めのない、霊的な実を結ばない民であったことがよく分ります。宮には両替人や鳩を売る者がいて、イエス様は両替人の台や鳩を売る者たちの腰掛けを倒されました。ユダヤ人は半シェケルを主への奉納物として納めることになっていましたが、（出エジプト記３０章１３～１６節参照）納入金には、当時一般に流通していた皇帝の顔や銘などが刻まれた異邦人のお金ではなく、宮で用いられるお金であるシェケルに換金する必要がありました。そのために両替人がいたのですが、手数料としてその十分の一から六分の一を取って、暴利をむさぼっていたようです。また女性のきよめや貧しい者たちのささげ物としての傷のない、検査済みのささげ物としての鳩が売られていました。ささげ物を自宅から持って来るのも大変でしたし、検査済みであればささげる人も安心だったので、便宜のために必要であったとは思いますが、宮の外で買う値段の１５倍であったと言われています。まさに暴利をむさぼり、私腹をこやす強盗の巣だったのです。ですからイエス様も両替であるとか、ささげ物としての鳩を売る行為自体を問題にされたのではなく、それらを金もうけの手段にしていたことを問題にされたのです。特に、貧しい者たちに対する救済手段としてのささげ物である鳩が法外に値段で売られていたのでは、貧しい人たちは神にささげ物をすることをあきらめなければなりませんでした。さらに神殿は４つの庭を持っていました。一番奥が祭司の庭、その外にイスラエルの庭、そのまた外に婦人の庭、一番外側が異邦人の庭でした。宦官や外国人は、この異邦人の庭までしか入ることができませんでした。しかし実際に商売がされ、通り抜けて器具を運びいれる近道にされていたのでは、彼らは祈りに集中することができなかったのです。イエス様は、回りの人々から低く見られ、虐げられているような人々が礼拝と祈りをささげることを妨げることを決してお許しになりませんでした。神は、すべての民が礼拝されるべきお方なのです。「わたしは彼ら（宦官たちや外国人）をわたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で楽しませる。・・私の家はすべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。（イザヤ書５６：７）とあるとおりです。また「わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる。」とありますが（１７節）まずイエス様は、神の宮をわたしの家と呼んでいます。つまり、神の御子であるイエス様は、ご自分の家であった宮を人が自分たちの利益のために好き勝手に使われることに我慢ならなかったのです。二つ目が、宮は民が祈り、礼拝をささげるべき場所で、そのようにしてふさわしく用いられるべきでしたが、そうはなっていませんでした。そして、宮は、異邦人を含めあらゆる民が集う祈りの家とすべてきでしたが、一部の人々の祈りやささげ物が妨げられていました。私たちの教会を主はどのように見られているでしょうか。ここはわたしの家だと言われる主の教会が、主のみこころにかなったかたちで用いられているでしょうか。ここは、あらゆる民の祈りの家となっているでしょうか。

７月２６日（土）マタイの福音書１１章１８，１９節
「祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。群衆がみなその教えに驚嘆していたため、彼らはイエスを恐れていたのである。」（１８節）

１５節から１７節は、宮きよめなどと呼ばれたりしていますが、本当の意味できよめられなければならなかったのは、祭司長たちや律法学者たちでした。神の住まわれる宮をふさわしく管理することができず、むしろ自分の私腹をこやしていることを指摘されたわけですから、彼らはイエスの前に悔い改めるべきでした。ところが、彼らは自分たちの行いを悔い改めるどころか、「どのようにしてイエスを殺そうかと相談した」のです。なぜ彼らがイエスを殺そうとしたのかと申しますと、彼らは社会的にも、政治的にも、経済的にも力を失うことを恐れました。イエスが、自分たちに取って代わられるのではないかと恐れたのです。それと同時に、イエスがローマ帝国に対して反乱を起こそうと企んでいるのではと疑った可能性もあります。彼らは、あまりローマ帝国ともめ事を起こさないで、平和に生活できればいいと思っていたので、ローマ帝国が介入するようなことを起こしてほしくないと思ったのです。

主は、私たちの教会を「わたしの家」と呼ばれ、「わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる」（１７節）と私たちに対しても語られます。もちろん教会で私腹を肥やしたり、何か悪事を行う人はいないでしょう。しかし、主の教会をあたかも自分の教会のようにして私物化することはないでしょうか。または、教会についての様々な問題に無関心であったり、腹を立てるということはないでしょうか。むしろ、主がみことばを通してそのように指摘されたなら、私たちはともに一つとなって謙遜に悔い改めるべきでしょう。また、私たち一人ひとりも悔い改めるべきことは謙遜に悔い改めるべきです。イエス様を通して祭司長たちや律法学者たちに見られる罪の性質は、この時代の宗教指導者限定ということではなく、今も変らず私たちの間に見られるものです。だからこそ自分にはこのような罪はないか、常に自らを顧みなければなりません。